

須恵器窯の歩き方

——篠窯跡群分布調査のために——

木 立 雅 朗

はじめに

立命館大学歴史考古学ゼミでは一九九九年度以来、亀岡市篠窯跡群の分布調査を行ってきた。一九九七年度に行った大津市仰木遺跡窯跡の発掘調査によって、いわゆる「篠鉢」の原型に近いタイプの須恵器を確認したことが最初の調査要因であった。篠窯跡群は、平安時代の須恵器窯跡・瓦窯跡として全国的に著名である反面、京都縦貫道建設に伴う発掘調査以来、その研究が十分に進んでいなかった。立命館大学から近く調査しやすい環境にあったという好条件もあったが、分布調査を進めるうちに、その方法論を学生とともに模索する必要があると感じはじめた。

高度経済成長以後、行政発掘に追われてきた日本考古学では、発掘調査の技術や遺物整理の技術が大きく進展している。ただし、行政発掘の進展は自主的な考古学調査の自律神経を損なう部分があることも確かである。各地で盛んに行われていた分布調査は、一九九九年当時、極めて少なくなっていた。そのことは行政発掘が減少しつつある現在でも変わらない。今現在、考古学の野外調査方法を確立するために、もともと望まれているのは分布調査の方法を磨くことであり、そのことは学生が考古学を学ぶためにも必須の事項であると考えている。

たとえば、遺跡が立地しそうな地形を探し出し、実際の踏査で見出す

には、事前の調査とともに詳細な地表観察が必要である。地表から遺構・遺物の有無を観察する方法は経験に追う部分が多い。しかし、そうした経験は成文化されず、後の発掘調査の成果の影に隠れてしまうことが多い。分布調査なくして発掘調査の成果は見込めないし、発掘調査の成果なくして分布調査の課題は生まれない。ここではそうした視点と重視した上で、須恵器窯跡群の歩き方、あるいは、分布調査の視点と方法についての試行錯誤を紹介したい。

一．山の生活知識から見た「窯」

山で生活をしている方々の智慧は、遺跡を踏査し観察するためには不可欠な情報を多く含んでいる。その方々から学んだことを紹介したい。

山の生活知識(一) — 微地形と水 —

須恵器窯は稀に天井が残っている例があるが、大半は操業中や操業後に天井が崩落している。窯の天井が崩落した後には土砂などが流れ込み、陥没痕跡が目立たなくなるが、地表面にその痕跡が残ることがある。その場合、発掘前に詳細な地形測量図をとっておけば、発掘された窯体と発掘以前の窪みの位置がよく合致する場合がある(丹波周山窯跡など。京

都大学考古学研究室一九八二)。ただし、そうした埋没痕跡を明瞭に残すのは地下式窯に限定されるだろう。半地下式窯でもそうした痕跡は残りうるが、地上式窯では残りにくいどころか、全く逆に窯体が土手状に盛り上がる場合も想定される(後述)。

なお、斜面全体がわずかにくぼんでいた場合、雨水などを集めやすいため、そのような地点に窯を築くことは少ない。例外的に備前焼の大窯がそのような地形を好むというが、備前焼独特の田土と大窯の特徴から生まれた特殊な事例だと想定される(備前市教育委員会石井啓氏ご教示)。

考古学研究者は多量の遺物が出土する地点にトレンチを入れることが多い。窯に近い地点に遺物が集中すると考えるためである。ある中世陶器の窯跡発掘調査に参加させていただいた時、遺物集中地区の溝状窪みの地点に最初のトレンチが設定された。窯体の落ち込みである可能性を想定してのことであったと記憶している。山中の広い範囲に遺物が散乱している規模の大きな窯跡であり、どこに窯があるかを捜索すること自体が難しい遺跡だったため、微地形と遺物散布状況を熟慮した上で選ばれたことは間違いない。

その時、発掘調査に作業員として参加した地元住民のある方が次のような指摘をした。「遺物が沢山出土しているけれども、その下は水が滲み出している。そのような水が集まる場所で窯を見つけたことがない。考古学を勉強したことはないが、山芋を掘ったり猪穴を探したりして山中をよく掘ったから、どんなところに窯があるか、よくわかっていいる。窯はもつと乾いたところにある。あっちの斜面だ」。その指摘どおり、水が滲み出す部分に窯は存在せず、指さした地点で窯が検出された。多量の遺物が出土していたのは、わずかな谷地形に失敗品などを投棄したためであった。「山」の生活知識に基づいて、「山」全体の微地形や特性を観察する必要があることを示している。

なお、水が滲み出す場所は窯の温度を上げることができないために避けられるが、水は窯体を構築したり、修復したりする場合には必ず必要になる。そのため、窯体の直下から滲み出す水は嫌われるが、付近に水を得る場所があったほうが便利である。意図的に水を手しやすい立地条件を選んだと想定される場合もある(山形県高安窯跡。北野二〇一〇)。

窯の立地条件や埋没状況を検討することは、分布調査にとって重要な観察項目である。また、それは発掘調査に際しても重要な情報となる。窯がどのようにして埋没していったのか、埋没後はどのような環境にあったのかなどを考える上で、発掘前の地形測量図がもつ情報は多い。しかし、多くの場合、発掘後の地形測量図を掲載する例がほとんどである。地形の観察は発掘前と後の双方で行わなければ意味が少くない。分布調査では発掘前のことしか理解できないが、小規模な地形改変(掘削や地滑りなど)は表面観察で判明する場合もある。

山の生活知識(二) — 窯壁は資源 —

石川県の白山麓で育った故・伊藤常次郎氏は焼畑農耕や炭焼きの暮らしを守り伝え、その豊富な知識を活かした民俗研究者としても活躍された。かつて、伊藤さんが須恵器窯の復原実験をされていたときに見学させて頂き、経験に基づいた沢山のお話を伺うことができた。伊藤氏によると、「炭焼窯を新しく築く時、天井粘土に焼粉を入れると丈夫な窯になる」と言う。一度焼かれて収縮した窯壁は粉にしても縮まない。生粘土だけで作ると収縮率が高いが、焼粉を入れると収縮率を抑えられるため、確かに合理的な方法である。しかも、一度完成した窯の天井は、わざと叩いて大きなヒビを入れる。窯は焼成中に熱で膨張し、焼成後に収縮する。その時の遊びの部分を作っておかないと丈夫な窯にならないためだと言う。炭焼き窯の経験から伝えられた「丈夫な窯」のノウハウは大変

参考になったが、その次の話には本当に驚かされた。

「炭焼をしていた時には窯跡を掘り出して窯壁を取り出し、それを焼粉として新しい窯を作った。私は考古学を勉強している人たちよりも須恵器窯跡がどこにあるかよく知っている。それがないと丈夫な炭焼窯が作れないからだ」。須恵器窯跡群がある地域で暮らす人々にとつて、「須恵器窯跡」も大切な「資源」の一部なのであった。自分でも分布調査をしたことがある南加賀古窯跡群を別の角度から歩いて成果を納めていたことを知り、衝撃は大きかった。伊藤さんのような生活の必要に迫られた窯跡探索を、考古学研究者は行っていない。炭焼窯を作る立地条件と須恵器窯のそれとはよく似ていたであろうから、須恵器窯跡を見つけることも簡単だっただろう。私たちは、そうやって活用された須恵器窯跡の「跡」を分布調査で「発見」し、発掘調査していると考えたほうがよい。

なお、森内秀造氏は窯跡の窯壁を削り取った「ブルムケの窯」を発掘した際、窯壁が再利用されたと考えた（森内二〇〇二）。いつ再利用されたのかを明らかにすることは難しいが、窯跡周辺で何らかの窯を築く場合、再利用されることは当然あっただろう。窯跡の埋め土から新しい須恵器が発見される場合、そうした再利用による可能性もある。操業直後に次の窯のために窯壁を採取した可能性もあるが、かなり後世になってから発見され、採取された可能性もある。古ければ採取痕跡が埋まって残りにくいと思われるが、採取時期が新しければ、採掘坑が落ち込み痕跡として残されている可能性もある。

管見による限り、森内氏の指摘以外、「窯跡」が資料として再利用されたという報告事例を知らない。窯跡の発掘調査や分布調査ではそうした視点は完全に抜け落ちている。古墳の発掘であれば「盗掘坑」を検出することはよくあるが、窯跡の発掘調査の場合、窯壁は最初から「研究の対象外」であり、「除去すべき対象」にすぎないため、それがどのように

して壊れて埋没していったのか、埋没したものが後世にどのように動かされたのか、というような検討はほとんどなされていない。断面図はとられているが、窯の幅や床面の枚数を確認することに主眼がおかれている。「埋め土」の記載が省かれた断面図をよく見かけると、記載があったとしても、そうした部分に注意が払われているようには思えない。

発掘調査の精度は年々上がっていると聞くが、窯跡発掘のノウハウを蓄積した窯業産地こそ、そうした手順を省く傾向にあるのではないか。確かに、そのことによつて遺物収集に集中することができる。「遺跡埋没後の状況」は多くの発掘現場で検討が省略される傾向がある。未だに「お宝探し」「潮干狩り」的な遺物の盗掘状態が続いていると揶揄されても仕方がないと思う。

二．窯の立地条件と窯構造

須恵器窯の立地条件は、窯構造に関わりなく一致する部分と、窯構造に起因して異なる場合がある。水が集まる場所を避けること＝窪地を避けることは窯構造が違つても一致する。土質は地下式の場合、大きな問題をもつが、半地下式や地上式の場合、地下式が作れないような岩盤やその近くであっても立地する場合がある。土砂崩れが多いような地質条件では、地下式窯の築造は危険を伴う。しかし、地上式窯の場合、そうした地質条件の中に条件に合致したピンポイントの狭い部分を選んで立地する場合がある。

窯の築造方法による三つの分類と定義

須恵器の窯構造は地下式窯・半地下式窯・地上式窯の三つに分類できる。「地下式窯」は斜面をトンネル状に掘り抜いて作る窯であり、「地下

掘り抜き式窯」とも呼ばれている。「地上式窯」は窯体の大半を地上に構築したものであり、「地上窯体構築式窯」とも呼ばれている。「半地下式窯」は、斜面に掘った溝の上に天井部のみを架構するものである（森内二〇一〇）。なお、地上式窯も斜面に僅かながらでも溝を掘っている。

従来、「地下式」と「半地下式」の二つに大別されていたが（田辺一九六六など）、私自身は、「掘り抜き式」と「天井架構式」の二つに大別して捉えるべきだと考えている。「半地下式」は「地下式窯」と地上式窯の中間的なもの」というよりは、天井を架構するという意味で「地上式」と同じ仲間として捉えるべきだろう。

(一) 地下式窯

前述のように、地下式窯の天井が崩落していた場合、遺跡化して埋没した後であっても、窯体の陥没が溝状の落ち込みとなって残る。さらに前庭部も僅かながらに平坦な微地形が残る。溝と平らな面のセットが確認された場合、地下式窯であったと想定できる。

地下式窯を掘削する場合、前庭部を大きく削りだし、そこから窯体を掘り抜いたと想定される。また、排煙口付近には煙道や排煙調整溝などの施設が作られるため、排煙口付近も大きく削りだされることがある。削り出した土やくり抜いた土は、開口部から斜面下に捨てるしかないため、前庭部がさらに広くなる場合がある。

なお、窯の床面の傾斜角度と地表面の傾斜角度は必ずしも一致しない。焚口と排煙口の比高差が焰のひきを左右するため（余語二〇一〇）、窯焚きの技術として重視すべきなのは床面の傾斜角度ではなく、焚口と排煙口の比高である。焰は床ではなく、天井を這うことが多い。天井の高さや角度、ウイング状の施設こそが窯焚き技術にとって重要な要素なのだ。残念ながら天井を詳細に観察しうる例は少ない。

地下式窯の場合、窯の床面角度、煙道の長さや焚口と排煙口の高さを

計算して窯をくり抜く地点を選択したと想定される。意図的に傾斜変換点を狙って築造している地下式窯が目立ち、窯の設計プランにとって作業量を軽減しやすい、実現しやすい条件があったと想定される。

しかし、残念ながら、そうした自然地形の変換点を意識して発掘調査報告書に図面が掲載されている例が少ない。窯体そのものに関心が集中し、自然地形の特徴、とくに傾斜変換点を活かした窯作りの知識や自然地形への適応の在り方について、検討されることが少ない。おそらく、同じ地下式窯であったとしても、自然地形の特徴によって、傾斜変換点を選択しない地域や時期、好んで選択する地域や時期があると想定される。薪燃料の選択の利用については理解が進んできているが、それとは違う視点から自然地形の選択についても検討する必要がある。

ところで、「前庭部」は、窯詰めや窯焚き作業などのために必要なスペースとして、意図的に造り出した「作業場」だと考えられていると思う。ただし、「前庭部」は斜面を垂直に削りだした場合、否応なく同時に削りだされる。さらに窯築造の掘削土を斜面下に投棄した結果、窯の前に平坦面が造成されることになる。そのため、「前庭部」は掘削と造成土の廃棄によって否応なく形成される性格のものである。しかし、従来の調査では前庭部が削りだしであるのか、盛土であるのか、十分に吟味された例はほとんどないと思う。窯の築造に関わる周囲の景観変化のすべてとともに、排出した土の処理問題も重視する必要がある。「前庭部」が排出土の未処理の結果広くなったのか、必要なスペースとして積極的に造り出されたのか、遺構精査・断ち割りなどによって検討されるべきだと思う。場合によっては排出土のすべてが確認できる例や、排出土の存在がまったくわからない例がある。

実は、地上式窯の場合、「窯詰め・窯焚き」として必要なスペースが発掘調査で検出されることは少なく、確認されたとしても、地下式窯に

比べて狭い。前庭部があったとしても、僅かな盛り土で形成される程度で、残りにくく、狭いものだったと想定される。そのため、すべての窯で地下式窯ほどの広さの前庭部が必要だったとは思えない。実際に傾斜変換点で窯を作ったため、搬出した土のほとんどが急傾斜地に廃棄され、前庭部が削りだし部分しか残らない例や、地下式であるのに排出土による前庭部がほとんど確認できない例もある。地下式窯は長時間の焼成を前提とした燃費の悪い窯であったと想定されるため、地上式窯に比べて大量の薪をストックしなければならなかった可能性は残るが、それと前庭部の広さの問題は別に検討しなければならない。床面の叩き締め範囲や状態の検討も含めて、薪の運搬からストックの一連の流れを検討する必要はあるだろう。そのような問題があるにしても、地下式窯の場合、斜面の掘削と掘削土の投棄のため、広い前庭部を造成せざるを得なかったことも間違いがない。そうした前庭部は窯が埋没したあととも痕跡として残る可能性がある。

なお、自然地形を活かして垂直の壁を造り出さずに掘削を始めた場合、掘削土は崖下に落ち込み、広い前庭部を作らない場合がある。窯体だけでなく、前庭部も、ほとんどが削り出して造成される。牛頸窯跡群のなかにはそうした窯がよくみられるように思える。

ところで、大野城市教育委員会の舟山良一氏によると、牛頸窯跡群の発掘調査では、灰原の掘削のためにロープに捕まりながら斜面を移動することが普通だという。何人もの作業員が虎ロープに繋がりながら発掘作業を進めている状況をはじめて見学した時には大変驚かされたが、案内をしてくださった舟山氏が「そんな当たり前のことが珍しいのか」と述べられたことにも、合わせて驚かされた。同じ地下式窯卓越窯跡群である南加賀窯跡群ではそのような光景を見たことがない。南加賀には牛頸のような地形・土質の山がないためでもあるが、様々な意味での地域

性が発掘スタイルまで規定している好例だと思う。自然条件によって異なるだけなのか、そのような地形を積極的に好んで選択しているのか、そのような地形でなければ作ることができない構造の窯だったのかなど、様々な角度から地域性を検討する必要がある。

(二) 半地下式窯

半地下式窯は斜面に溝を掘り込み、その後で天井を架工する。基本的に煙道と言われるような長い煙突部分は存在せず、窯の床面と斜面の角度も近似する。とはいえ、地下式窯と同様に、開口部と前庭部は削りだして造成される。掘削土は天井架工のために利用されることもあり、地下式窯ほど大量にでるわけではない。また、地下式窯と違って掘削土は真横にも捨てることができる。ただし、開口部から搬出するほうが作業は楽だったと思われる。いずれにせよ、土の量は地下式窯ほどではないため、地下式窯ほど広い前庭部ができるわけではないと想定される。地下式窯と半地下式窯の前庭部の大きさを比較した例を知らないが、今後はそうした比較も必要になってくるだろう。

なお、半地下式窯の場合、窯周囲の施設は排水溝などが紹介される程度であろうが、窯体を浮かせるようにして周囲を掘り込む例があり（石川県和気後山谷一号窯・和気小しょうぶ谷二号窯。亀田二〇〇五）、地上式窯の窯周囲掘削の在り方と半地下式を対比させる必要がある。地上式窯については周囲の遺構に注意が払われるが、半地下式窯の場合、往々にして周囲に注意が払われていないように見える。それは地下式窯に窯周囲の遺構が少ないことの影響であろう。窯体の周囲の精査は、工房や作業場などの付帯施設の検出のためにも欠かせない視点であり、注意が必要である。

半地下式窯も地下式窯同様、天井が崩落した場合、遺跡化して埋没した後に溝状痕跡が残る場合があると想定される。しかし、その痕跡は地

下式窯ほど明瞭ではなかった可能性が高い。

(三) 地上式窯

地上式という言葉から、完全にすべてが地上に浮き上がっているように受け止められているかもしれないが、若干の掘り込みをもっている。天井部分が架工されることは半地下式と変わらないが、地上式の場合、側壁も造り出され、窯の外側には保護土が貼り付けられる。典型的な例では、窯が立地する周囲が掘りくぼめられて不整形な溝、もしくは階段状平坦面が巡り、結果的には窯全体が蒲鉾状、あるいは土手状に浮き上がった状態になる。周囲を掘りくぼめるのは、窯体の大部分を地上に浮き上がらせ、地面との接触をできるだけ少なくする工夫であったと想定される。大地との接触部分が大きければ地中に熱を奪われる反面、地中に蓄熱される。空気に触れる部分が大きければ蓄熱はされないが、放熱も少なくなつたと想定される。その点が地上式窯にとって、最大の特徴であつたと考えている。また、周囲を掘りくぼめることによって地表面を流れる雨水などを避けることもできたろう。テラス状になっている場合には薪などの集積場としても使用した可能性も想定される。

地下式や半地下式の場合、地中に滲みている水は大敵であり、そのために窪み状の部分を選んだと想定されるが、地表面を流れる水についてはさほど頓着しなかつた可能性がある。少なくとも、地表面の水をカットする施設はそれほど多くはない。地上式の場合、地下水に加えて地表面を流れる水に注意を払つていたと想定される。

掘削する土は天井と側壁に使用されるため、投棄される土はほとんどでない。周囲を掘りくぼめる際にでた土も窯の保護土として貼り付けられたと想定される。この保護土が確認されるか否かが、地上式窯であるかないかの重要な指標になる。通常、窯跡の「断ち割り」調査は補修や床面枚数の確認が主目的とされ、窯内にとどまっている。しかし、保護

土は窯の外側に貼られるため、その断ち割りを窯外にも連続させる必要がある。半地下式でも天井部に保護土が貼られる可能性があるが、側壁まで保護土が確認されれば、地上式と認識してもよいと考えている(仰木遺跡窯跡の発掘調査では藤原学氏と森内秀造氏に現地でご指導いただき、断ち割りを延長してはじめて認識できた)。窯外に広がった断ち割りによってさらに深く掘り下げることができれば、窯が築造された基盤の状況が従来以上に明確に確認できるだろう。

なお、排煙口部分や窯に作業平坦面が削りだされている例があるが、これは排煙口の操作のためだと想定される。窯の周囲に掘られた不整形な溝、もしくは階段状平坦面は雨水などの排水と排煙口への作業通路の役割を果たしたと想定される。

本来ならば窯焚きのため、薪を積み上げたり、作業したりする前庭部も必要であつたと想定されるが、前述のように、前庭部が検出された例はほとんどないと思われる。窯の造成に際して排土がほとんどでないため、あつてもわずかな盛り土によってできた小さな面積にすぎず、発掘前に流出して失われる程度のものであつたと想定される。今後、前庭部が発掘調査で確認されることがあつたとしても、それは地下式窯に比べて著しく狭いものだったと想定される。おそらく、「前庭部」での作業空間は必ずしも平坦でなければならなかつたわけではないのだろう。地上式窯の場合、窯焚き作業に際しては、むしろないほうがよかつたのかも知れない。具体的に明らかにできないが、それは焚き方の違いに繋がる可能性もある。

地上式窯の場合、天井が崩落せずに残つた例は聞かない。地下式や半地下式の場合、天井部が完全に残る例や、部分的に残る例が僅かながらでも確認される。地上式の場合、それらに対して脆弱で残りにくかつたのだと想定される。構造上の問題もあるだろうが、焼成温度や焼成時間

による焼き締まり、操業回数のおよび焼き締まりなど、それらより小さかった可能性も想定される。少ない観察例にすぎないが、窯壁に付着する自然釉の状況や、出土する製品の自然釉や焼き歪みの程度などから、そうした推測ができる場合がいくつか確認される。

さらに大きな違いは、天井が崩落しても、その痕跡が地上に残りにくいことである。もともと蒲鉾状に盛り上がった部分が崩落しても、水平に近くなるだけで陥没痕跡が残りにくい。むしろ、天井が崩落した後ですら、窯壁の破片が堆積して周囲より高くなる場合もあったと想定される。そのため、分布調査によって窯体の落ち込み痕跡や前庭部の痕跡を見いだすことは不可能であろう。多くの場合、周辺と変わらない斜面上に戻ってしまったと想定される。

三、須恵器窯跡群分布調査の課題

地表面観察と窯構造

以上のように、窯構造によって、地表面に残される痕跡が異なると想定される。地上式が主流を占めると想定される篠窯跡群の分布調査において、これまで窯体の陥没痕跡を見つけたことがない。「灰原」を確認し、窯体の場所を特定できた場合であっても、切り通しの断面で窯体を確認した場合であっても、天井陥没による窪み地形の残存は確認できなかった。このことは傍証になる可能性がある。

窯体の陥没痕跡や前庭部の痕跡が確認できる場合は、地下式、もしくは半地下式である可能性が高い。少なくとも、地上式ではないだろう。その逆に陥没痕跡が全く確認できない場合は、いずれの窯構造であるのか、その埋没状況によって異なるであろうから厳密な識別はできないが、

地上式であった可能性は高まる。そのような視点でも微地形を観察する必要があるだろう。

このような視点で窯跡を踏査・発掘できるならば、窯築造に際して生じた排土の処理方法から前庭部の機能の問題・窯構造による窯焼き方法の比較検討などに研究を展開できると思う。

窯壁片の検討と観察

分布調査はもとより、発掘調査においても、窯壁片を採集して検討した例は数少ない。窯壁片は窯跡であることを示す大切な証拠であり、分布調査では必ず採集すべきものだと考える。窯跡であるのかそれ以外の遺構なのかを判断する基準は、窯体・灰原の確認がもつとも重要である。窯壁片は動きうる資料だが、焼き歪んだ資料と合わせて窯跡が近くにあることを示す重要な指標になりうる。また、その窯壁片から地下式窯のものか、地上式窯のものであるかという検討も成されるべきである。少なくとも、どのような状態の窯壁であるのか、スサ入りであるか、窯壁の中に木舞状の芯材が確認できるのか、地山削りだしのものか、どのような焼け具合か、どのような形状か、など観察すべきことは多い（浜中二〇一〇参照）。

「灰原」と遺物散布と窯体

窯跡の分布調査では遺物の散布範囲を把握し、「灰原」の位置を特定する。通常、その「灰原」の斜面上方に窯体があると考えられる。しかし、「灰原」の残存は遺跡によって異なることが多く、埋没して地表面に現れていない場合もある。その場合、遺物の散布範囲や状況を把握して窯跡かどうかも含めて検討する必要がある。遺物だけが散布する場合、必ずしも窯跡があるとは限らないためである。

滋賀県大津市仰木遺跡窯跡の発掘調査に際しては、遺物の散布範囲の斜面上方に「灰原」と窯体があると想定した。しかし、実際には「灰原」が小さく、斜面下のかなり離れた地点にしか「灰原」が確認できなかった。遺物の散布範囲は窯跡より上に広がっており、何らかの作業や後世の土の移動によるものとした考えられなかった。残りのよい窯跡では窯体の下に「灰原」が形成され、遺物の散布も「灰原」を中心に広がる。仰木遺跡の場合、柿の木畑から檜林に改変された土地であり、土地利用が変転した場所であったため、後世の土の移動も想定される。ただし、遺物散布範囲の発掘調査を行っていないため、そこに何らかの遺構があった可能性も残る。分布調査だけでは、そうしたことで明らかにすることは困難である。

なお、「灰原」と鍵括弧付きで呼ぶのは、真っ黒の炭の粉状の土層に対して「灰」と呼ぶことに抵抗があるためである。その状態からいえば「炭原」と呼ぶほうがふさわしい。この用語のはじまりについては不勉強であるが、中世以降の陶磁器窯の「物原」を古代の須恵器窯に当てはめた用語だと想定される。

窯跡の断面図と斜面の記録

窯跡の実測図では横断面と縦断面が必ずつけられており、その形状を理解しやす。しかし、旧地表面のラインが表示されない例が多い。窯体を検出したたり、掘り下げたりする際に不手際があれば、縦方向の土層断面をとりづらくなり、床面だけの断面図になることがある。あるいは、地下式窯の場合には深く危険なためにあらかじめ周囲を掘り下げてから掘削するため、旧地表面のラインを記録することができない場合もある。安全管理の問題も避けられないとはいえ、行政発掘の現場では時間や予算が優先され、必要な部分を省略せざるを得ない場合がある。そのよう

な状態も悪い影響を与えているのか、旧地表面のラインを記録しない窯跡の発掘調査報告書が多い。報告書に記載しただけでなく、最初から必要のない情報として注意されず、発掘現場での作業が省略されているのではないだろうか。それに加えて周囲の地形測量図がないため、旧地表面の地形が全くわからない例が少なくない。行政的に限界があるならば、せめて窯体を斜め前方から撮影した写真を掲載してくれば、どのような地形を選択しているのか理解する助けになる。しかし、そうした写真すらないものが多い。

なお、地山や旧地表面の状態こそが重要な情報であり、天井崩落後の地表面の状態に意味がないと考えられ、断面図に図化されなかった場合もあるかもしれない。確かに窯築造前や築造段階の地表面の状態が重要であり、それは周囲の観察によって復原する必要がある。しかし、崩落後の状態も重要な情報である。また、周囲の状況から窯築造以前の地表面を復原することも重要な作業になる。必ずしも杓子定規に発掘以前の地形を記録すればよいわけではないと考えている。

「どのような傾斜を選択的に選んでいるのか」、そして「その地形をどのように変更して須恵器窯や周辺施設を作ったのか」という視点は、発掘調査報告書にとって大切ではないように思える。窯床面の傾斜角度は重要な情報として記述されても、旧地表面の傾斜角度が報告される例はほとんど見ない。「行政発掘の限界」を理由にして省略されたことが、そのまま踏襲されたのだろうか。窯の前後左右を含めた周囲の地形観察・記録が必要だと考えている。

分布調査で窯を探す場合、発掘された窯跡の状況からその地域の窯の立地条件を検討することになる。しかし、現状では発掘調査報告書の大半は分布調査の参考にするには情報不足である。篠窯跡群の分布調査においてはクリノメーターを使用して現地で地表面の傾斜角度を略測する

ようにしている。なお、窯が立地したと想定される斜面は一定の角度ではなく、谷底付近・中腹・頂上付近などで傾斜角度が変化している。そのような変化を利用してため、傾斜変換点毎に傾斜角度を計測するように努めている。しかし、それを発掘例と比較することが難しい。篠窯跡群の場合、多くが地上式であったと想定されるため、床面の傾斜角度と地表面の傾斜角度は類似していたと想定しているが、厳密に言えば、そのことを確認することができない。新たに発掘調査するしか確認するすべがないのである。

地下式窯の場合、どのような傾斜をもった斜面をどのようにくり抜いたのが重要な観察項目になる。地域や時代によっては特徴的な傾斜の部分を狙って窯をくり抜いていると想定されるからである。地表面の傾斜角度と窯の床面の傾斜角度は、半地下式や地下式の場合には異なっていたと想定されるし、それを計算して築造したはずである。その計算こそが重要な研究視点であり、分布調査の際にも役立つ情報になる。

四．篠窯跡群の特徴と分布調査

―発掘調査報告書の批判的検討―

丘陵西側斜面に多いこと―窯の立地と風―

立花正寛氏は篠窯跡群の窯の立地について、次のように述べている。「各窯は、菅原一・二号窯を除き、丘陵西側斜面に位置している。これは、もつとも焼成に適した一定方向に吹く風（四季を通じて晩秋から冬にかけてのような湿度の低い、乾燥した北西風の冬型季節風）を長時間受けることができる篠地域の谷あいので形を考慮したためと推察される。中世における六大古窯跡群にも、また現代の薪窯においても同様のことがみら

れる」（立花一九八九、九八頁）。水谷寿克氏と岡崎研一氏も同様の指摘を繰り返している（水谷・岡崎一九九一、二三一頁）。窯自体が湿度から守られ易い、周囲全体が乾燥しやすいという意味であるならば理解できるが、風を求めて窯が立地したという理解は首肯し難い。

実際の窯焚きの際して、高温に達した窯に風が吹きこめば炎が逆流して焚口から吹き出し、窯焚き作業が危険になる。また、窯内部に風が入れば、高温になった製品や窯にとっては非常に冷たい空気が吹き込むことになり、冷め割れを起こす危険性が高い。現在の窯焚きでは、冷たい風が吹きこむのを防ぐように注意を払っている。覆屋を作って焚口周辺を広く覆ったり、焚口部分を鉄板や耐火ボードで蓋をして焼成しているのはそうしたことも原因である。発掘調査で前庭部に覆屋が検出される場合、一般的には窯焚き作業や薪の雨除けとして捉えられていると思う。しかし、風除けの効果も期待されていた可能性があると想定している。

季節風によって窯の湿度を低く押さえられるとすれば、窯焚き段階でも同じ危険を伴うことになる。焚口を風から守る施設が必要になるだろう。風は窯焚きにとっては湿度と同様に大敵である。なお、篠窯跡群では多くの窯が丘陵頂点部分より下に立地している。これは排煙口に風が吹き込んで焔の引きを弱めることを避けたためではないかと想定している。煙道がない場合、風は排煙口においても嫌われたと思われる。

季節風は季節限定であるにしても、強い風の吹きうる地帯は避けた可能性が高い。湿度と風の双方を避けるのが窯焚きの基本的な知識だと思ふ。このことは、窯跡研究会の須恵器窯焼成実験の経験とそれに参加して下さった陶芸家の方々から教えて頂いた経験による。なお、現代の陶芸家の多くは薪窯の経験が豊富であり、篠窯跡群発掘調査段階よりその経験が深まっているように感じている。また、季節風についても、道路建設に伴う発掘現場では山林の樹木がすべて伐採された状態であったと

想定されるが、そのような状態で感じる風と樹木がある状態とは大きく異なる。須恵器窯が山を丸裸にしていたのであれば、歴史的追体験といえるが、現状ではその可能性は高くはない（北野二〇一〇・小林二〇一〇など）。以上の理由で、季節風などの自然の風を利用したために窯の立地に偏りが生じたわけではないと考える。

丘陵の特徴的地形(一)

— 溪谷の発達と地図に表現されない崖 —

篠窯跡群を踏査すると、川筋で崖が発達していることに気づく。そのことは二五〇〇分の一地形図を眺めていても見えない。写真測量で作成された地形図はそういう意味で役に立たない。地図を頼りにしていると、川向こうの丘陵に渡ることができない「溪谷」が突然現れて驚かされることがある。林道などを境にして急激に落ち込む崖地形も、多くの場合、地図に表記されない。篠の踏査経験からすると、比較的大きな谷であれば川にそって谷を移動することが困難で、尾根筋に移動するしか方法がない地点が多かった。小さな谷であっても下流域ほど崖が発達している例もあり、谷筋の山道は比較的発達していないように感じる。低い丘陵では谷筋や川に平行している山道もあるが、高い丘陵で崖が発展している場合には崖より上の斜面を迂回せざるを得ない状態であった。特にアナウシ谷奥や石原畑支群では、溪谷が移動を阻み、窯跡の対岸に移動できない。

灰ヶ谷一・二・三号窯は、「灰ヶ谷」と呼ばれる谷に等間隔に並んで発達見されている（灰ヶ谷二号窯は藤原重彦氏発見。三号窯は二〇〇八年立命館大学発見）。しかし、それぞれの窯跡の中間に地図に現れない崖が発達している上に小規模な滝状の地形もあり、谷川や谷下部を移動しようとすると、たどり着くことが困難であった。しかし、尾根に近い山道では

楽に到達することができた。窯体を確認することができなかったが、少なくとも崖が発達した斜面中腹以下には立地し得ないし、移動も困難である。おそらく、斜面中腹以上の尾根筋に近いルートを使用していたと想定され、将来は窯体もそのルート沿いで検出されるだろう。

丘陵の特徴的地形(二)

— 地層傾斜による斜面の角度の違い —

篠窯跡群が立地する丘陵は、大きく眺めれば、京都市西京区から続く山塊の一部である。京都市で「西山」と呼ばれる山脈は、京都市側から眺めると急峻な斜面だが、亀岡市側から眺めるとそれは対照的になだらかな斜面である。さらに細部の地形をみると、篠窯跡群が立地する谷筋の地形は、東向き斜面が急峻で西向き斜面はなだらかである点で「西山」の地形と一致している。おそらく、地層の傾斜が地形の特徴に反映していると想定される。篠窯跡群が立地する丘陵を東西方向に見れば、ちょうど縦挽き鋸の歯のように見えるだろう。そのため、篠窯跡群では東向き斜面は相対的に急で窯を築造することが困難である。それに対して西向き斜面には窯を築造しやすい斜面が発達している。

アナウシ谷・アナウシ谷奥窯跡、石原畑窯などはそうした状況が明確で、いずれも西向き斜面に窯が築造されている反面、反対側の東向き斜面には窯が確認されていない。ただし、この東向き斜面は傾斜がきつすぎで、とても踏査ができない地形であるため、正確にいうならば斜面の踏査ができていない。踏査は歩きやすい崖下の谷底の一部にとどまっている。現状の地形が奈良・平安時代も変わらなかったと想定されるから、窯そのものを作るような地形ではなかったと考えている。こうした特徴は石原畑窯より西側、篠インター付近ではやや薄まっているが、それでも黒山窯が立地する丘陵はその傾向が明瞭である。黒山ほど明瞭では

ないが、騎馬ヶ谷・騎馬ヶ谷奥窯が立地する丘陵にもその傾向が見て取れる。騎馬ヶ谷奥窯も西南斜面に面している。ただし、黒山ではそうした地形に反して丘陵頂上部の傾斜がゆるやかな部分を利用して、東の急傾斜側に面して窯が作られているようだ。丘陵上平坦面を利用して小型三角窯が立地している可能性もある。

なお、谷の片側斜面だけに窯が築造される場合、谷全体の薪燃料を管理していたと想定することもできるが、このような地形上の制約を受けていた可能性も想定しておく必要があるだろう。

地下式窯であれば比較的急な傾斜でも窯を作ることができるとは、地上式の窯構造は急傾斜の斜面に築造することが困難である。踏査の段階ですでに「ないだろう」という先入観をもって臨んでいることも確かだが、今のところ、急傾斜の斜面では基本的に窯は確認されていない。

地質条件による窯の分布限界

—京都市よりの部分は礫が多く、窯築造に不利—

石原畑支群の踏査を行い、さらにそれより東側の谷筋の踏査を行ったが、急激に礫が増加し、粘土質の地山から礫が多い地山に変化していった。西山に近づくほど、礫が卓越するように感じた。石原畑支群が東限になり、それ以东では遺物も全く採集できなかった。こうした条件のもとで窯を築造することは不可能ではないが、困難であろう。篠インター付近の窯が密集する地点ではこうした礫を見た記憶がない。土質の条件がよい部分に結果として窯が集中している傾向を確認できる。

播磨では岩盤付近に窯を築造した例もある。地上式の窯であれば粘土さえ至近距離にあれば築造できるためであろう。篠窯跡群ではそこまでして窯を築造していなかったと想定される。自然条件に恵まれていたこともその理由になるだろうが、条件のよい地点を選ぶことができる社会

的条件が整っていた可能性も想定される。このような分布の様相から、窯の操業を許された範囲を抽出し、社会との関係について検討する必要もある。

埋没微地形と窯構造

篠窯跡群の分布調査では、地表面観察で灰原を確認できたとしても、窯体の陥没痕跡を見つけたことがない。それは主たる窯構造が地上式であったためだと想定される。発掘調査ではすべてが半地下式であると報告されている。確かに半地下式を含んでいるが多くは地上式であろう。埋没微地形が残らないことも、そうした想定を補強してくれる。

「灰原」と「小規模地滑り」の問題

窯跡を発見する契機は様々であるが、用水路や林道、山道などによって土層断面が露出している部分でなければ発見は困難である。中には腐食土で土壌が全く露出していなくても、大量の遺物が散布して認識できる場合もあるが、過半数は土壌の露出が重要な鍵になる。そのため、分布調査では土壌が露出している部分を中心に観察することになるが、いくつかの窯跡の灰原や灰原の下方で小規模な地滑り状の痕跡を確認することができた。窯の操業によって周囲の立ち木が伐採されるなど、自然環境が大きく改変された場合、そうした地滑りが起こりやすかったのではないかと想定している。小規模な地滑りには凹部と溜まりの両方が確認されるが、「灰原」もひとつの地滑りを形成している場合がある。アナウシ谷奥二・三号窯では林道法面に灰原が露出しており、その露出範囲から灰原の広がりが見える。離れて眺めると、灰原だけが僅かに盛り上がりが見える。若干は下方にずり落ちた可能性があるとは言え、窯から掻き出されたまま、凸状の堆積が維持されている可能性がある。ま

た、石原畑四号窯の灰原下方には小規模な地滑りによる小さな凹地が確認された。ここでは灰原層は確認されず、赤土の流土が崩落した様子がわかるが、そのなかに上の灰原層から流れ込んだ須恵器が若干含まれており、その露頭の確認が窯跡発見のきっかけとなった。通常、凹地状に崩落する部分は水が滲み出すなど、水を集めやすい微地形が確認されるが、ここではそうしたことは確認しなかった。かつて、窯が作られた時に周囲の開発や土の移動が何らかの影響を与え、それが後世に小規模な地滑りを起こさせた可能性も想定される。遺物を含む地滑り地帯には、人間活動の何らかの影響を読み取ることができる可能性がある。単純な自然の崩落であればもともと当時の人々も避けていたはずであり、遺物も含まれないだろう。

ただし、小規模な地滑りが確認されるからといって必ず窯が存在したとは限らない。小規模な地滑りが確認されるからこそ、結果として遺物の散布が確認しやすくなり、遺跡発見に到る。逆にいえば、小規模な地滑りが起こらなかった場合、遺跡は発見しにくくなる。周辺の地形をさらに詳細に検討し、小規模地滑りのメカニズムを解明したい。そのためには、地滑りとその周辺の発掘調査やボーリング調査などが不可欠であろう。従来の発掘調査でこうした現象について注意が払われた例を聞かない。篠特有のことであるかも含めて検討が必要である。

灰原以外の遺物集積地

―窯跡ではない「遺物散布地」の意味―

窯跡周辺には「製品集積地」などと呼ばれる遺物集積地が確認されることがある。灰原から採集される遺物は黒色の炭が付着しているが、窯跡周辺では灰原層から洗い出されるなどして黒色炭や土が完全に洗いとられた遺物を採集することも多い。それは灰原土が雨で流しとられたた

めだと考えられる。しかし、鍋倉二一号窯では赤土が付着しているにもかかわらず、黒色炭層が全く確認できなかった。周囲を確認すると、山道の拡張工事で現れた露頭の赤土層から遺物が採集された。窯壁の細かな凹凸内にまで赤土が充填されているため、遺物洗浄の際に難儀した記憶がある。そうした例は灰原以外に由来する遺物だと考えられる。おそらくは製品を選別して廃棄されたり、不良品をストックする「場」が窯の周辺に設けられていたのである。これより低い部分に灰原層が露出していたため、明らかに別遺構があると想定された。

発掘調査では明確な遺構が確認されない場合が多いため、「窯」や「灰原」と同じレベルで認識されているとは思えないが、遺物の散布状態などを総合的に検討すれば、明確にそうした「場」を認識せざるを得ないだろう。それが窯に隣接する場合もあれば、やや離れて存在する場合もある。作業面や工房などの遺構が検出される可能性もある。滋賀県春日北遺跡では窯体の背後の削りだした平坦面に多量の遺物と窯壁片が積み上げられており、窯壁片のストック場として認識されていた（平井美典二〇〇九）。

灰原以外の遺物散布地は、工房や製品集積地など、さまざまな事例があり、定型化して認識できる「遺構」ではないが、その存在や意味について十分に検討する必要がある。分布調査においても、「遺物の散布」について灰原からの流出として簡単に処理するだけではない。おそらく、こうした遺物が採集される地点を発掘調査すれば「工房」などの作業空間が検出されるのだろう。遺物を採集した際には、その器表面の状態やどの地層に由来するのかなど、周囲をよく観察して検討すべきである。

なお、小谷一・二号窯（二〇〇九年立命館大学新発見窯）では山道の造成によって切断された窯体断面から遺物を採集できたが、この場合も遺物表面には赤土が付着していた。窯体内を埋めた土が遺物の表面を覆って

いたためである。

須恵器窯跡と山道・獣道―地形と通路―

篠窯跡群の分布調査においては、窯が立地しそうな地点を重点的に踏査し、急な斜面など、須恵器窯が立地しそうな地点はできるだけ省くようにしてきた。しかし、それでも予想外の地点から須恵器を採集することがあり、可能な範囲で面的な踏査も心がけている。なお、崖で遺跡がないと思いついた谷底で遺物を採集することもあったが、それは崖の上に良好な斜面があることを見落としていたためであった(二〇一一年発見の下東山六号窯など)。急傾斜や崖に窯や遺跡がないことは明らかであり、地形の観察が重要であることは論を待たない。そして、いくつかの遺跡を発見していくうちに、山道沿いに窯跡が多いことに気づいた。現在でも山道が縦横に走っているが、以前に比べて山に入る人々の数や頻度は少なくなったと想定される。それでも主要な山道は「歩きやすい部分」や「移動に必要な部分」にあり、維持されている。なかには獣道化して人間が通らない部分もあるが、そうした道も含めて、窯跡を発見した部分には何らかの通路が存在することが多い。ブッシュで完全に覆われたり、急斜面や崖によって到達しがたいわけではない。多くの場合、比較的到達しやすい部分に窯が集中しているという印象をもつ。これは須恵器窯築造や焼成に際しても、製品の搬出入を含めた移動を重視して選地されたためだと想定される。その意味で当時の道を復原しつつ、窯の分布を確認すること、崖に囲まれていても歩いて到達できる道を探すことが重要である。まったく足を踏み入れることができないような前人未到の困難地を無理に踏査する必要は少ないと感じている。ただし、地形の特徴があり、それを読みこんで踏査する必要はある。

私は学生時代、古墳の分布調査をする際、どうやってブッシュを克服

するか、どうやって踏査困難な急斜面ややせ尾根を踏査するかというような、ある種のサバイバル・ゲームのような感覚をもって挑んでいたことがあった。しかし、篠窯跡を踏査し続けるうち、そうしたイメージは小さくなってきた。今にして思えば、古墳の分布調査でも踏査が困難な地点で発見したことはなかったと思う。理に合った築造計画がなされていたのである。前述した灰ヶ谷支群の三つの窯はまさしく、そのとおりの分布をしめしている。谷川を苦勞して遡って発見した灰ヶ谷三号窯は、山腹を走る山道を使えば簡単に到達できた。さらに谷奥の二号窯・一号窯も同じ山道を使えば簡単に到達できた。西山三号窯(二〇〇九年立命館大学発見)の周辺は急峻な斜面で山腹の山道が発達していなかった。ここでは珍しく谷筋の道が発達しており、急峻な斜面をさけて、踏査が楽な谷道を歩いている時に遺跡を発見した。

「通路」は今も昔も歩きやすい部分に存在した可能性が高い。それを復原すること、「地形を読み解く」ことが重要であることを痛感している。なお、以上のことは山城や宗教的施設では当てはまらない可能性がある。ここで紹介している特徴はあくまで須恵器窯跡に限定した傾向にすぎないことを断っておく。

「地形を読み解く」ためには結局のところ、「歩くことができる部分」をすべて歩くしかない。本当に遺跡があるなら、たとえ目の前に崖があっても、必ずどこかに到達しやすい別ルートがあるだろうから、「迂回」して全面踏査を行うべきである。危険な崖や急斜面であることがわかれば、無理や危険を承知で踏査する必要は全くない。しかし、「遺跡がなさそうだから省く」という消極的姿勢だけでは地形を読み解くことができない。遺跡発見以上に「地形を読み解く」ことを重視し、そうして読み解いた地形と「遺跡」との関係性を検討することがもつとも重要である。

ところが、発掘調査でそうした道について検討されることは少ない。

発掘調査のためにつける通路は重機を使用することもあり、従前の「山道」などを利用しないことも多い。自然も地形も破壊してから発掘調査に入るならば、そうしたイメージを形成しにくい。

窯の回帰と森林再生のサイクル

―八世紀後半の窯跡に再来する一〇世紀の窯―

石原畑支群では八世紀後半代の窯が廃絶したあと、空白期間を置いて一〇世紀代の窯が再来している。こうした例は三軒屋東窯跡でも確認できる（三軒屋東窯跡は発掘されていないが採集須恵器は「八世紀中ごろから九世紀代のものが中心で、一部十世紀中頃のものと思われるものがある」という。樋口二〇〇〇、二七四頁。現地を確認したところ、一〇世紀代の須恵器は斜面下方に集中していた）。自然回復を待つて再来したと考えることもできるが、戦略的に古い窯跡の近接地を選び、窯壁の再利用をもくろんだ可能性も想定される。すでに指摘されているように山頂付近に作った八世紀後半の窯に比べて一〇世紀の窯はそれより下方に築かれている。しかも、平坦面に近い。そのため、窯と「現地工房」が近接するタイプだと想定される。八世紀後半代の窯はそうした周辺施設はやや離れていることが多い。斜面を雛壇場に造成しなければ窯に近接させることができない地形である。富山県小杉流通業務団地内遺跡群で確認されるようなタイプのテラス状遺構が埋没している場合、分布調査では明らかにしたいが、遺物が灰原を越えて広く分布していることを確認できれば、関連施設の広がりや認識できる可能性もある。しかし、現状では灰原以外の遺物の広がりを確認できないため、「現地工房」を想定しがたい。八世紀後半代は窯と「現地工房」が離れていた可能性が高い。こうした空間利用の違いは、八世紀後半と一〇世紀の生産システムの違いに起因している可能性がある。なお、近年藤原重彦氏や立命館大学が発見した七世紀後半

八世紀前半の窯（自蓮坊・地藏ヶ尾地内）は、丘陵先端部に立地している。そのため、窯の近くに「現地工房」の存在を想定しやすく、八世紀後半とは異なっている。

発掘調査しなければ最終的な結論を出すことはできないが、分布調査であってもそのような目的を持って微地形や遺物散布状況を検討することで一定の成果が期待できる。

五・考古学の野外調査としての分布調査と現代学生

華々しい発掘調査の成果については、各地で学ぶことができる。しかし、都市化や再開発が進行した現在、自然の中に遺跡を探し求めるような「古くさい考古学」は、もはや、はやらないように見える。「町を離れて野に山に 遺跡求めて行く俺は …」（「考古学エレジー」の歌詞の一節）などという牧歌的な考古学的調査よりも、重機に追われて調査する工事的発掘調査のほうが一般的になってしまった。学生たちの生活環境も大きく様変わりし、かつてのように野山を歩き回り、遺跡・遺物と直接的に対話していた「考古学少年」はほとんど見ない。また、普及啓蒙活動が進んだ現在では、遺跡や遺物とのふれあいはある意味で間接的にならざるを得ない。どんなに充実した遺跡公園や考古学博物館があったとしても、それは「創られた遺跡・遺物」という側面がぬぐえない。現在の生活環境のなかでは、自然との関わりは極端に少なく、遺跡・遺物と自然環境との関係を考える力が乏しくならざるを得ない。自然の中に残された「遺跡」から過去を復原する能力、そして、発掘調査の課題を入手する能力を涵養する必要がある。

学生たちの観察力・想像力は、その生い立ちによって大きく異なる。野山に遊んだ経験がある学生は視点が鋭く、「分布調査」のノウハウを素

早く習得する。それ以外の多くの学生は、ついて歩くのに必死で、遺跡の環境を観察し、立地しやすい地点を探し出すなどということとは難しい。どうしても遺物を採集するだけの踏査に終始してしまう。

実は高度経済成長期に育った私自身、今の学生と同じ問題を持っている。かろうじて前近代的生活の智慧のシッポに触れたとは言え、それ以前の人々に比べて遥かに自然環境に対する観察力が弱い。自分自身も野外調査によって鍛錬しなければならぬ立場であることは違いない。学生とともに自然環境から多くのことを学ばなければならない。また、かつての発掘現場では、山野についての経験豊かな方々が作業員として参加され、多くのことを学ぶことができたが、今ではそうした人々もめっきり減少してしまった。私のような高度経済成長期に育った人間に役割があるとするれば、そうしたことを自覚し、橋渡しすることだと感じている。

篠窯跡群は都市部に隣接しながら残された希有な窯跡群であり、歴史的意義も高い。こうした模索を行うには理想的な窯跡群である。

大規模発掘調査と遺跡破壊

須恵器窯跡の発掘調査は、高度経済成長期以降、「開発」という名の里山破壊によって進行した。研究史に残る猿投窯跡群や陶邑窯跡群の研究も、開発に対応した事前調査に違いない。そのため、大半の窯跡は失われ、その成果を検証することが困難になった部分があることは否定できない。事前の分布調査を行ったとはいえ、自主的な研究活動によって発掘調査の課題を抽出したわけではなかった。その意味で社会変動に対する受け身の対応であったと言える。分布調査の成果は地味で気長あることは間違いないが、目的をもった自主的な分布調査は、かつての発掘調査とは異なり積極的意味をもつ。

おわりに

かつて、分布調査と発掘調査は、野外調査の車の両輪であるとして、分布調査も相応に重視されていた。時代は進み、行政発掘の成果の前に、遅々とした分布調査は時代遅れの感がぬぐえない。しかし、健全な考古学研究の展開のためには不可欠な知的営為だと考えている。雑感に過ぎないが、こうした視点が発掘調査でも注意されれば幸いである。

参考・引用文献

- 石川県辰口町教育委員会一九八五『辰口町湯屋古窯跡』石川県能美郡辰口町教育委員会
- 金沢大学考古学研究会一九八一『金沢大学考古学研究会活動報告第三号―活動一〇年のあゆみと能美古窯跡―』
- 窯跡研究会編二〇一〇『古代須恵器窯業の基礎研究―須恵器窯の技術と系譜―』真陽社
- 亀田文哉・望月精司二〇〇五『和気後山谷窯跡群』石川県辰口町教育委員会
- 木立雅朗二〇〇五『日本における陶窯研究の現状と課題』『窯跡研究』創刊号、窯跡研究会
- 北野博司二〇一〇『須恵器窯業の生態と社会―窯の分布論―』『古代須恵器窯業の基礎研究―須恵器窯の技術と系譜―』真陽社
- 京都大学考古学研究会一九九二『岩倉古窯跡群』
- 京都大学文学部考古学研究室一九八二『丹波周山窯址』
- 小林克也二〇〇八『東北地方須恵器窯業の森林利用』『研究集會 古代窯業の森林利用技術―陶人と森との関わり―』文部科学省私立大学オープン・リサーチ・センター整備事業（平成一七〜二一年度）「地域文化遺産の循環型保存・活用システムに関する総合的研究」
- 立花正寛一九八九『篠古窯跡群における半地下式窖窯の窯体構造について』『京都府遺跡調査報告書第一一冊 篠窯跡群Ⅱ』財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

- 田辺昭三一九六六『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古学クラブ
 浜中有紀二〇一〇「窯構造の判別方法」『古代窯業の基礎研究―須恵器窯の技術と系譜―』真陽社
 樋口隆久二〇〇〇「三軒家東窯跡群」『新修亀岡市史 資料編第一巻』亀岡市史編さん委員会
 平井美典二〇〇九『春日北遺跡現説明会資料』滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会
 水谷寿克・岡崎研一九九一「篠窯跡群」『京都府埋蔵文化財論集 第二集―創立十周年記念誌―』財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 森内秀造二〇〇二「窯跡の調査と研究」『田辺昭三先生古希記念論文集』田辺先生古希記念の会
 山田邦和一九九一「窯業製品」『古墳時代の研究』第五卷、雄山閣（のちに「須恵器の生産と流通」として山田邦和一九九八『須恵器生産の研究』学社に補訂再録）
 渡辺一二〇〇六『古代東国の窯業生産の研究』青木書店
- （本学文学部教授）